HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オーストラリアへ渡ったアイヌ民族の遺骨と小金井良精
Author(s)	加藤, 博文
Citation	アイヌ・先住民研究, 2, 31-56
Issue Date	2022-03-01
DOI	https://doi.org/10.14943/Jais.2.031
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84500
Type	departmental bulletin paper
File Information	02_2_Kato.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アイヌ・先住民研究　第２号　2022　p.031–056　ISSN 2436-1763
Aynu teetawanoankur kanpinuye (2) 2022　p.031–056　DOI 10.14943/Jais.2.031

【論文】

オーストラリアへ渡った アイヌ民族の遺骨と小金井良精

加　藤　博　文*

要　旨

本論は、日本人初の解剖学教授である小金井良精が関わった国際的な先住民族の遺骨交換についてオーストラリアの研究者との関係から取り上げたものである。具体的には、オーストラリア国内の博物館に残された資料と小金井良精に自身による日記の記述を対比することで、交換されたアイヌ民族の遺骨の由来と履歴を検証した。また日豪双方で関与した研究者について検討を加え、先住民族の遺骨が国際的に交換された背景の解明を試みた。

キーワード：アイヌ民族、国際返還、先住民返還問題、小金井良精、オーストラリア

1　はじめに

先住民族の祖先の遺骨をめぐる諸問題は、先住民返還問題（Indigenous Repatriation）とも表記されるが、１）国際的には先住民族による不当に奪われた祖先の遺体や遺骨を原状へ復帰させる取組みと、２）先住民返還問題に至る歴史的背景を明らかにする取組みの、大きく二つの方向性を持っている。いずれの取組みも植民地の記憶と経験の解消という意味では脱植民地的な取組みであり、個別に独立したものではない。むしろ、脱植民地化は被植民地経験を有する先住民族にとってのみ重要なのではなく、植民地政策に関わった過去を有する学術界にとっても解消すべき重要かつ、不回避の火急の課題である。

返還へ向けた過程で繰り返される歴史の追体験と歴史的事実の確認は、先住民族と研究者の間に横たわる不幸な過去の関係を修復し、新たな信頼関係を構築する上でも重要なステップであるという指摘もなされている（Fforde et al. 2002 ほか）。何よりも先住民族と研究者間の関係の修復や新たな信頼関係の構築を通じて、先住民族側が抱える被植民地経験によって負ったトラウマの解消が期待できるという効果も指摘されている（Fforde et al. 2020 ほか）。

本論では、日本人初の解剖学教授であり、多くの門下生を育てた黎明期の人類学者である小金井良精（1859-1944）が関わった海外の研究者との間で行われた先住民族の遺骨交換を取り上げる。

*　北海道大学アイヌ・先住民研究センター

また何故に先住民族の祖先の遺骨が本来の安寧の地を離れて遠く海を越えて移送されてしまったのか、その歴史的背景として19世紀から20世紀初頭に展開された人種学的研究が抱える組織的課題にも言及したい。しかしながら、この課題が一つの論文で取扱うことが困難な規模と広がりを持っていることは言うまでもない。拙論がこの問題を論じる上で些かなりとも貢献することを期待するものである。この種の研究には、国を越えた共同研究が不可欠である。本論自体も海外の研究者の助力と情報提供を受けて初めて可能となったことを改めて強調したい。

2　オーストラリアでのアイヌ遺骨の確認の経緯

本論の切掛は、国際学会での報告とそこにおける議論から始まった。2016年８月28日から９月２日にかけて第８回世界考古学会議が京都市内の同志社大学を会場に開催された。東アジアでの初めての世界考古学会議の開催ということもあり、世界各国から多くの参加者があった。そこで取り上げられた議題も世界考古学会らしく、世界各地の考古学の動向や理論研究に加えて、研究倫理や先住民族と考古学の関係性を論じるセッションも複数設定され、活発な議論が行われた[1)]。

この会議の期間中に筆者は、オーストラリア国立大学先住民研究センターのガレシュ・ナップマン博士（Gareth Knapman）からオーストラリアの博物館に保管されているアイヌ民族の祖先の遺骨に関する情報提供を受けた。ナップマン博士の前職はメルボルンにあるヴィクトリア博物館であり、ヴィクトリア博物館にアイヌ遺骨が保管されており、それらの遺骨の収蔵経緯を記した文書も同時に残されていることを筆者に知らせてくれた。また同じセッションに参加していたオーストラリア国立博物館の主任学芸員であるマイケル･ピッカリング博士（Michael Pickering）からも､セッション終了後の談話の中でキャンベラにあるオーストラリア国立博物館にも同様にアイヌ民族の祖先の遺骨が保管されている事実が伝えられた。

世界考古学会議終了後にオーストラリアへ帰国したナップマン博士からは、ヴィクトリア博物館に保管されているアイヌ民族の遺骨に関連するリストと保管文書の写しが筆者の元に届けられた。2017年６月８日付でナップマン氏から筆者に提供された情報には、以下の情報が含まれていた：

①ヴィクトリア博物館が保管するアイヌ民族の祖先の遺骨の収蔵番号

②アイヌ遺骨を受け入れた際の台帳の記載内容

③アイヌ民族の遺骨をヴィクトリア博物館に寄贈した東京帝国大学小金井良精名誉教授（当時）からの書簡と資料を受け取ったダニエル J. マホニー（Daniel J. Mahony　1878-1944）博物館館長（当時）による返信の写し。

1)　全体セッションの一つとして、先住民考古学のセッションが企画され、日本の先住民族として北海道アイヌ協会理事長である加藤忠氏（当時）が報告を行なっている。

筆者は、提供された資料中でも特に③の小金井とマホニーの間で交わされた書簡が、当時の研究者間で行われた先住民族の祖先の遺骨交換を具体的に証明する史料として重要な意味を持つと考えた。また 2017 年５月１日にオーストラリア国立博物館のピッカリング博士から送付されたメールでは、現在、オーストラリア国立博物館が保管するアイヌ民族の祖先の遺骨について、この遺骨が旧オーストラリア国立解剖学研究所からオーストラリア国立大学へ 30 年間の契約で長期貸出された先住民遺骨コレクションの一角を構成するものであり、元来、アデレード大学の病理学者かつ人類学者であったウィリアム ,R. スミス（William R. Smith 1859-1937）のコレクションであったことを示す資料が添付されていた。

これらのオーストラリア側の研究者からの提供された情報によってオーストラリア国内の２か所の博物館にアイヌ民族の遺骨が保管されていること、また博物館への収蔵に至る経緯を記す書簡などの書類が伴うことが明らかとなった。筆者はオーストラリア側からの情報提供を裏付ける資料を日本側でも収集し、具体的なオーストラリアへアイヌ民族の祖先の遺骨が渡った背景を明らかにする必要があると考え、日本考古学協会の理事でもある佐藤宏之東京大学教授、日本人類学会の理事（当時）でもあった石田肇琉球大学教授の協力を得て調査を行うこととした。幸い筆者らの調査研究計画は 2017 年度の科学研究費補助の補助を受けることができ、現地調査を行なうことが可能となった。

３　オーストラリア国内で確認されたアイヌ民族の遺骨について

最初に本論文の切欠となったオーストラリア国立大学のナップマン博士とオーストラリア国立博物館のピッカリング博士から提供された情報について確認しておきたい。

ヴィクトリア博物館に保管されている２体のアイヌ民族の遺骨とその収蔵に至る経緯を示す文書は、以下の通りである：

収蔵番号 42741: Ainu: Hokkaido（1936 年４月登録　寄贈者：小金井良精）

収蔵番号 43103: Ainu: Sakhalin Island（1936 年 10 月登録　寄贈者：小金井良精）

史料１：1934 年 11 月５日付、ギルバート・リッグからマホニー宛の東京訪問報告

史料２：1935 年 10 月 10 日付（11 月５日受領）小金井からマホニー宛書簡（手書き）

史料３：1935 年 11 月 26 日付、マホニーから運送会社への書簡

史料４：1936 年 10 月６日付、日本郵船の税関証明書

史料５：1936 年４月 16 日付、小金井からの受領証明

史料６：1936 年４月 16 日付、小金井からの受取り資料メモ（手書き）

史料７：1936 年４月 16 日付、マホニーから小金井宛の頭骨と石膏模型受領の礼状

史料８：1936 年７月 21 日付（８月 20 日受領）、小金井からマホニー宛手書き書簡
史料９：1936 年９月７日付（９月 29 日受領）、小金井からマホニー宛手書き書簡
史料10：1936 年 10 月９日付、小金井から寄贈された樺太出土のアイヌ頭骨の受取メモ
史料11：1936 年 10 月９日付、マホニーから小金井宛アイヌ遺骨受領の礼状

これらヴィクトリア博物館に保管されていた往復書簡を含む史料から読み取ることが可能な小金井とヴィクトリア博物館との交換に関するやり取りの要旨は以下の通りである。

１）ヴィクトリア博物館へアイヌ民族の遺骨が移送される前にギルバート・リッグという人物が東京で小金井と面談し、アイヌ民族の遺骨がヴィクトリア博物館へ寄贈されることになったこと（史料１）。
２）リッグが小金井と接触した時点で、アイヌ民族の遺骨をオーストラリアの博物館へ送る一方的な寄贈ではなく、アイヌ民族とオーストラリア先住民の遺骨を相互に交換する提案がなされていたこと（史料１）。
３）小金井がマホニーへ 1935（昭和 10）年 10 月に寄贈したものがアイヌ民族の頭蓋骨１体分と石膏模型１点であったこと（史料２・史料７）。
４）マホニーから小金井に対しても 1936（昭和 11）年４月にオーストラリア先住民の遺骨が交換として寄贈されていること（史料５・史料６）
５）1936（昭和 11）年９月に小金井からマホニーへさらに１体のアイヌ民族の遺骨が追加寄贈されていること（史料８・史料９・史料 11）
６）1936（昭和 11）年９月にマホニーへ追加寄贈されたアイヌ民族の遺骨がサハリンで発掘されたものであること（史料 10）。

往復書簡や関係書類は、ヴィクトリア博物館に保管されていたアイヌ民族の遺骨が東京帝国大学名誉教授であった小金井良精とヴィクトリア博物館館長であったマホニーとの間で行われた研究目的での先住民族の遺骨の交換であったことを明確に示していた。

一方で、オーストラリア国立博物館のピッカリング博士から提供された史料には、次のようなものが含まれていた：

史料１：1936 年２月７日付、仲介業者からマッケンジー卿宛の依頼書簡
史料２：1936 年３月 10 日付、マッケンジー卿から仲介業者宛の返信書簡
史料３：1936 年３月 10 日付、仲介業者からマッケンジー卿宛の書簡
史料４：1936 年４月３日付、マッケンジー卿から仲介業者宛の返信と輸送方法について
史料５：1936 年４月７日付、仲介業者からマッケンジー卿宛の返信
史料６：1936 年４月 15 日付、マッケンジー卿から連邦健康局長宛の遺骨輸送に関する書簡

史料７：1936 年４月 21 日付、連邦健康局長からマッケンジー卿宛の書簡

史料８：1936 年５月４日付、研究所長代理から仲介業者宛の書簡

史料９：1936 年５月６日付、仲介業者から所長代理への令状

一連の文書から当初、アデレード大学のウィリアム・スミスが保管していた先住民族の遺骨コレクションを、1936 年６月に旧オーストラリア国立解剖学研究所が当時の所長であるコリン・マッケンジー卿（Sir Colin McKenzie 1877-1938）の名のもとにアデレードの民間業者であるセオドア・ブルース社を通じて購入し、その後にオーストラリア国立大学へ旧オーストラリア国立解剖学研究所から 30 年間の契約で長期貸出されたものであること、その中にアイヌ民族の１体分の頭蓋骨が含まれていたことが明らかとなった。

このようにオーストラリア国内のメルボルンとキャンベラの２箇所で確認されたアイヌ民族の遺骨とそれに関わる史料の発見によって、当時オーストラリア側の解剖学者と小金井良精との間に組織的な遺骨交換が行われていたことが明らかとなったのである。

4　人類学者小金井良精について

アイヌ民族やオーストラリア先住民の遺骨は、なぜ遥か遠く海を越えて祖国を離れた地へと運ばれなければならなかったのであろうか。ここでオーストラリアへアイヌ民族の遺骨を寄贈した小金井良精の人物像について確認しておきたい。小金井良精（1859-1944）は、日本人として初めて解剖学研究室の教授に就任し、また日本における自然人類学の創始者としても知られる著名な解剖学者・人類学者である。小金井の略歴については教え子である横尾安夫によるまとまった紹介がなされている（横尾 1942:439-478）。ここでは横尾によりまとめられた略歴に沿って小金井の研究者として生い立ちと背景を整理しておきたい。

小金井良精は、現在の新潟県長岡市に越後長岡藩の上級藩士の次男として 1859（安政５）年に生まれた。1870（明治３）年６月[2]に上京した小金井は、13 歳で大学南校へ入学する。1872（明治５）年 10 月には、学制変更により設立された第一大学区医学校へ 15 歳で入学した。第一大学区医学校は、1880（明治 13）年７月に名称が変更され東京大学医学部[3]となる。小金井はここを首席で卒業し、卒業後は外科学教室の御雇教師であったウィルヘルム・シュルツ（Wilhelm Schultze 1840-1924）の助手となり[4]、解剖学の指導を受けた（横尾 1942: 442）。助手として勤務した同年の 11 月に

2)　日本では明治５年12月２日まで旧暦を採用していたため西暦とのズレが生じている。

3)　小金井の入学した第一大学区医学校は、1874（明治７）年に東京医学校となり、1877（明治10）年４に東京開成学校を併合して東京大学となった。そのため小金井が入学したのは、第一大学区医学校であるが、卒業は東京大学医学部となっている。

4)　小金井が医学部に雇用されたのは、卒業前の1880（明治13）年５月である。

は日本人初の解剖学専攻の留学生としてドイツへ派遣されることとなる[5]。

留学期間は帰国する 1885（明治 18）年６月までの足掛け４年半に及んだ。留学当初はベルリン大学に籍を置くが、1882（明治 15）年３月にストラスブルク大学へ移り、解剖学教室主任教授ハインリッヒ・G. ワルダイエル教授（Heinrich W.G. Waldeyer-Hartz 1836-1921）の下で解剖学と組織学を学んでいる[6]。またワルダイエル教授が 1883（明治 16）年にベルリン大学へ移動すると、小金井も共にベルリン大学へ移籍し、やがてベルリン大学医学部の助手に任命されている[7]。

1885（明治 18）年６月に帰国した小金井は、同年７月に帝国大学医科大学講師に任用され、９月より組織解剖学の講義を始めた。翌 1886（明治 19）年３月には、29 歳で帝国大学医科大学教授に任じられる。その後の小金井は、長きに渡り解剖学教室を主宰し、1893（明治 23）年に日本解剖学会を創設､1893（明治 26）年から 1896（明治 29）年まで帝国大学医科大学学長を務め､1902（明治 32）年には東京学士院会員となった。

1921（大正 10）年に 64 歳で定年退官するまで多くの後進を育成しており、小金井の薫陶を受けた研究者は数多い。小金井研究室の卒業生には長谷部言人、森於兎、山崎春雄、平光吾一、横尾安夫などがおり、長谷部、山崎、横尾らは後にアイヌ民族の遺骨収集に関わっている。小金井は退官後も名誉教授として学内に研究室を有し、晩年まで研究を継続した（横尾 1942）。小金井が 1888（明治 21）年と 1889（明治 22）年の２度にわたり行なった北海道でのアイヌ民族の遺骨収集調査は、日本人研究者による最初の研究目的で行われた組織的な先住民族の遺骨収集調査である（小金井 1889, 1926）。

5　日記に記された遺骨交換の過程

小金井良精は、詳細な日記をつけていたことで知られている。その一部は、小金井の孫である星精一によって『祖父小金井良精の記』として刊行され、広く知られている（星 1975, 2006）。その後、2016 年に小金井日記の全容が『小金井良精日記　大正篇・昭和篇』（2015）と『小金井良精日記　明治篇』(2016) として刊行された。この全４巻に及ぶ日記には､ドイツ留学を終える直前の 1883（明治 16）１月１日から 1942（昭和 17）年 12 月 31 日に及ぶもので、日々の研究や生活、小金井を取り巻く人々との交流が事細かく正月も含めて筆が途切れることなく記されている。この日記の記載

5) 日本から派遣されてドイツで医学を学んだものとしては、高知出身の萩原三圭（1840-1894）が最初である。萩原は戊辰戦争の最中の1868（慶応４）年に医学を学ぶためにヨーロッパへ渡り、ベルリン大学に留学している。1873（明治６）年にドイツ人解剖学者であるヴィルヘルム・デーニッツを伴い、帰国しい学校に奉職している。萩原は1884（明治17）年に森林太郎らとともに再度ドイツへ渡り、ライプチッツ大学に留学している。

6) 小金井がワルダイエル教授の下で学んだ背景には、小金井が卒業後最初に解剖学を学んだシュルツェの影響が伺える。御雇外国人として東京大学医学部に勤務していたシュルツは、ワルダイエルの教え子であった。

7) 助手としての俸給は200マルクであったという（小金井 2016）。

を追うことで、オーストラリアを含めた海外の研究者との間で交わされた研究資料の交換に関する手がかりを得ることが可能となった。オーストラリアの２箇所の博物館に残されたアイヌ民族の遺骨については、この『小金井日記』（以後、特に記載しない限り『日記』と表記する）に記されていた記述と博物館側に残されていた書簡との対比によって、アイヌ遺骨の由来が明らかにすることができた。

以下では、オーストラリア関係に限定してではあるが、『日記』に残された記述から小金井良精を経由してどのような経緯でアイヌ民族の祖先の遺骨が海を渡り遠く故地を離れた研究機関や博物館の補完されるに至ったのか、その来歴について確認していきたい。

最初は、オーストラリア国立博物館で確認されたアイヌ民族の祖先の遺骨についてである。先に述べたようにこの遺骨については、オーストラリア側に残された史料によってアデレード大学のウィリアム・スミスが本来所蔵していたコレクションに含まれていたことが知られていた。しかし、スミスの手元にどのような経緯でアイヌ民族の祖先の遺骨が渡ったのかについては、オーストラリア側に残された資料から知る術がなかった。このスミスの手元にアイヌ民族の遺骨が渡る経緯については、『日記』にその経緯を示した記述が残されていた。『日記』の 1911（明治 44）年３月９日には、次のような記載がある。

三月九日　木　晴

「・・略・・W・ラムゼイ・スミス博士（アデレード）、J.T. ウィルソン教授（シドニー）両氏へ過般阿蘇遠洋航海の際根来軍医少監を以て依頼せしところ豪州土人各壱個寄贈せられたるに付其返礼として「アイノ」頭骨一個つつ発送せし通知並に例を認む」

（小金井 2016b: 525-526）

この『日記』の記述に従えば、小金井が 1910（明治 43）年に練習航海に出た軍艦阿蘇に乗船した軍医長根来祐春[8]に海軍軍医総監であった本多忠夫を経由してオーストラリア・アボリジニの遺骨の入手をアデレードのスミスと、シドニーのウィルソン教授に依頼し、その返礼として両者にそれぞれ１体分のアイヌ民族の頭蓋骨を寄贈したことが判る。さらに３月９日の記述に遡る１年前の 1910 年１月 24 日と１月 26 日の記述には、練習航海へ出る関係者に小金井がオーストラリア先住民の頭蓋骨の入手を依頼したことが記されている。

8) 軍艦阿蘇による練習航海とは、1910（明治43）年２月１日に横須賀を出て７月３日に呉に帰着した第二期練習遠洋航海のことである。航路はフィリピン、マレーシア、オランダ領インドネシアを経由してオーストラリアへ向かい、タウンズビル、シドニー、ホバート、メルボルン、アデレード、アルバニー、フリーマントルを回航した後、バタビア、シンガポール、香港、基隆を経由して帰着している。なお練習遠洋航海日誌には、シドニーでウィリアム教授とアデレードでスミス博士に関係施設を案内してもらうなど直接接触があったことを記す記載が残されている。

一月二十四日　月　晴

「・・略・・練習艦隊出発の件に付本多忠夫氏へ電話を以て問合す、・・以下略・・」[9)]

（小金井 2016b: 449）

一月二十六日　水　雪

「・・略・・午後は約束通り海軍々医学校（築地）本多氏を訪ひ練習艦隊医官根来中監、大貫少監に頭骨採集依頼のことを託す・・以下、略・・」　（小金井 2016b: 450）

旧オーストラリア国立解剖学研究所所長のマッケンジーがアデレードの民間業者セオドア・ブルース社を通じてコレクションを入手したのは、スミスが亡くなる約１年前の 1936 年６月であった。しかし、スミスがアイヌ民族の祖先の遺骨をコレクションの一部として入手したのは、それを遡ること 25 年前の 1911（明治 44）年３月であったことが、この『日記』の記述から明らかである。そして 1910 年１月 24 日および１月 26 日、さらに 1911 年３月９日の『日記』に残された記述からは、このアイヌ民族の遺骨は、オーストラリア先住民の遺骨を入手した返礼として小金井良精から寄贈されたものであったことが判明したのである。さらに日記からは、この 1911（明治 44）年のアイヌ民族とオーストラリア先住民の遺骨交換先には、アデレード以外にシドニーがあったこと、シドニー側でこの交換に関わったのはシドニー大学のウィルソン教授であったことも明らかとなった。このシドニーに送られたアイヌ民族の祖先の遺骨については、現在も不明であり、継続調査中である。

次にメルボルンのヴィクトリア博物館との間で行われたアイヌ民族とオーストラリア先住民の遺骨との交換については、『日記』ではどのように記述されているのであろうか。

ヴィクトリア博物館との間の交換に関する記述は、実際に交換が行われる１年前の 1934（昭和９）年８月の記録に辿ることができる。『日記』には次のような記述が残されている。

八月十四日　火　晴

「・・（前略）・・ギルバート・リッグ（メルボルン博物館）より手紙及数枚の豪州人頭骨等の写真到達す」　（小金井 2015b:389）

八月二十三日　木　晴曇

「八、三五教室、午後メルボルン博物館関係の人ギルバート・リッグ氏来室　アイノ頭骨と豪州土人頭骨と交換の件、結局模型ということに話ひ会いたり・・以下略・・」（小金井 2015b:391）

翌 1935（昭和 10）年 10 月 10 日の『日記』の記述には次の記載がある。

9)　この日の記述の最後には、次のように台湾から台湾先住民の遺骨を入手していることも記載されている。「‥略‥台湾出張の椎野氏より生蕃頭骨送付到達せり」。

十月十日　木　晴
「七、三〇教室、メルボルン博物館と交換の約束品アイノ頭骨及同模型を送る旨の手紙を館長ダニエル・ダホニー宛書留にて出す」（小金井 2015b: 449）

この『日記』の 10 月 10 日の記述は、1935 年 11 月５日にマホニーが受領した小金井からの書簡である史料２に対応する。『日記』にある「メルボルン博物館」とは、ヴィクトリア博物館のことを指している。さらに『日記』の翌 1936（昭和 11）年５月 20 日から７月７日にかけての記述には、以下のような記述が見られる。

五月二十日　水　曇
「ダニエル・J・マホニー（メルボルン国立博物館館長）より頭骨交換に付昨年十月十日差出書面の返事及アイノ頭骨受領且豪州頭骨発送書簡達す」（小金井 2015b: 481）

六月九日　火　雨
「・・(前略)・・メルボルン博物館よりの荷物送り状を渡す・・(以下略)」（小金井 2015b: 484）

六月二十六日　金　晴
「・・(前略)・・メルボルン博物館より交換品として送り越したるオオストラリア土人頭蓋受取りの手続き横尾氏より申し来る」（小金井 2015b: 486）

七月七日　火　曇
「七、四〇教室、二、二六反乱事件判決あり、十三名死刑　メルボルン博物館とのアイノ頭骨二個既に先日着荷のところ漸く今日受領、男女のもの非常に立派なるもの満足の至り・・(以下略)」（小金井 2015b: 487）

七月二十一日　火　晴
「・・(前略)・・マホニー国立博物館館長（メルボルン、オーストラリア）へ豪州土人頭骨二個（アイノ頭骨との交換品）到着の手紙出す、本件はこれにて完く結了・・(以下略)」（小金井 2015b: 489）

上記の『日記』中の記述は、マホニーから小金井宛に送られた 1936 年４月 16 日付の１体分の頭骨１体と石膏模型１個の受領に対する礼状である史料７と対応する。７月 21 日の『日記』の記述にあるように一旦、マホニーとの交換は完了したとされた。しかし、その後夏を挟んで９月７日の『日記』の記載に小金井からマホニー宛にさらにもう１体のアイヌ民族の遺骨が贈られたことを示す記述が現れる。

九月七日　月　晴

「七、五〇教室、マホニー国立博物館館長（メルボルン、オーストラリア）へ書留書面出す　この夏横尾氏が樺太ポロナイ河口にて発掘せるアイノ頭骨を発送したること、前に交換品として送りたるものは先方より遣したる品に対し少し不十分に感じたるためなり・・以下略・・」

（小金井 2015b: 495-496）

この記述は、ヴィクトリア博物館の史料９、史料 10、史料 11 の記述に対応する。小金井は、７月にマホニーより届いた男女２体分の頭骨の状態を見て、自分が寄贈したアイヌ民族の遺骨では不十分であると考えたようである。そのため 1936（昭和 11）年夏に解剖学教室の講師（当時）であった横尾安夫（1899-1985）が新たに樺太のポロナイ河口（現在のサハリン州ポロナイスク近郊）にて入手した１体分のアイヌ民族の頭骨をマホニー宛に送付したと見なすことができる。このアイヌ民族の遺骨は、現在、ヴィクトリア博物館に所蔵されている収蔵番号 43103 の「Ainu: Sakhalin Island」（1936 年 10 月登録）に対応する。また合わせて収蔵番号 42741 の「Ainu: Hokkaido」が（1936 年４月登録）に先立ち交換資料として送られたアイヌ民族の遺骨であることが判る。

ここまで見てきたように『日記』の詳細な記述は、寄贈先の博物館に残る台帳や書簡資料と対応するものである。『日記』に残された詳細な記述と対比することで所蔵館側の史料に記載されていない事実（ここではアイヌ民族の遺骨の寄贈経緯と由来）が明らかになることが改めて示されたと言える。また海を超えて故地を離れた遺骨は、アイヌ民族の遺骨のみではなく、オーストラリア先住民の遺骨もまた小金井の研究室へ寄贈されていたことが明らかになった。現時点で日本の研究機関にどの程度の海外の先住民族の遺骨が保管されているのかを知る詳細な資料は、まとめられていない。その意味においても『日記』の記述を読み解くことで明らかになることはまだ少なくないと言えよう[10)]。

6　オーストラリア側の研究者について

ここまで見てきたように、現在オーストラリアの２つの博物館に保管されているアイヌ民族の遺骨には、小金井良精が資料交換を目的に積極的に関与していたことは明らかとなった。では小金井と遺骨の交換を行なったオーストラリア側の研究者はどのような研究者達であったのであろうか。

（1）ジェームス・ウィルソン（James T. Wilson 1861-1945）

『日記』の 1911（明治 44）年３月９日の記述に登場する「J.T. ウィルソン教授（シドニー）」と

10)『日記』に記された記述から推定するだけでも、北米先住民やハワイ先住民、南太平洋の先住民民族やコーカサス地域の民族など海外の先住民の頭蓋骨を小金井が入手していたことを窺い知ることができる。

は、当時シドニー大学医学部教授であったジェームズ T. ウィルソンを指している。ウィルソンは、1861 年 4 月 14 日にスコットランドのダンフリーシャー州モニアイブで生まれている。エジンバラ大学で医学と自然科学を学び（1883 年に医学士と化学修士の学位を得ている）、エディンバラの王立診療所で専属外科医として勤務した後、エディンバラ大学に再入学し、著名な解剖学者であったウィリアム・ターナー教授（Sir William Turner 1832-1916）の下で解剖学を学んだ。船医として中国に三度渡航した後に、1887 年にシドニー大学に新設された医学部の解剖学講座に解剖学デモンストレーターの職を得ている。1890 年にはチャリス解剖学講座の初代教授に就任した。1909 年にはロンドンの王立協会のフェローにも選ばれ、1908 年から 1913 年までは教授会議長を務めている。1920 年に医学部長に就任したが、同年８月にはケンブリッジ大学の解剖学講座に就任するためにオーストラリアを離れた。ケンブリッジ大学へ移動後は、セント・ジョンズ・カレッジのフェローとなるほか、ロンドン動物学会やケンブリッジ哲学協会のフェローや会長を務めた。イギリスへ戻った後もオーストラリアの大学運営に大学執行評議員として関わるほか、イギリス・アイルランド解剖学会の評議員や会長（1922 ～ 24 年）を務めている。

小金井との間でアイヌ民族とオーストラリア先住民の遺骨の交換が行われた時点では、シドニー大学医学部解剖学講座教授の地位にあった。現在でもシドニー大学にはウィルソンが収集した多くの人類学資料が保管されている。なお先に述べたように小金井からウィルソンへ寄贈されたアイヌ民族の遺骨については、関係各所へ問い合わせを行なっているが、現在まで所在を確認することができていない。しかし、『日記』の記録から見て小金井がウィルソン宛に遺骨を送付したことは確かである。さらに現在、長岡市立中央図書館文書資料室に保管されている「小金井良精資料」の書簡類の中には、1911（明治 44）年 4 月 27 日付のウィルソン教授からの小金井からの遺骨寄贈に対する礼状が保管されている。シドニーへ送られた遺骨の行方については、さらに継続して調べる必要がある。

（2）ウイリアム R. スミス（William, Ramsey Smith 1859-1937）

『日記』の 1911（明治 44）年３月９日の記述にウィルソンと共に登場する「W・ラムゼイ・スミス博士（アデレード）」とは、アデレードの衛生部門常任責任者であったウィリアム R. スミスである。

スミスは、スコットランド、アバディーンシャーのキング・エドワードで生まれている。長じた後、エディンバラ大学で芸術を学ぶ。一旦、パブリックスクールに校長の職を得るが、その後心理学に興味を持ち、1884 年にエディンバラ大学に再入学して医学を学ぶ。1888 年に自然科学の学士号を、1892 年に生物学と化学の修士号を取得した。

1896 年、南オーストラリア政府によってオーストラリアに招かれ、王立アデレード病院の病理部長の職に就いた。1899 年には市の検視官に任命され、アデレードの衛生部門の常任責任者となった。しかし 1903 年に検視官の立場を悪用し、遺体損壊、特に医学研究目的で遺体を収集している

という 18 件の告発を受け、検視官としての職務を停止された。調査委員会での審議の後に検視官としての地位を解任されたが、その後復職して違法な遺骨収集を続けた。1904 年にスミスはアデレード大学の自然科学部を卒業し、1913 年にエディンバラ大学から医学博士号を取得している。医学者としての活動以外にオーストラリア先住民に関する研究でも多くの業績を残し、1910 年には『オーストラリアの先住民(The Aborigines of Australia)』を刊行した。1929 年に引退した後もオーストラリア先住民が語る物語を集めた『オーストラリア先住民の神話(Myths of the Australian Aboriginals)』を 1930 年に出版している。

小金井との間でアイヌ民族とオーストラリア先住民の遺骨の交換が行われた時点でスミスは、アデレード市の検視官であり、同時にアデレードの衛生部門の常任責任者の任にあった。

(3)ダニエル J. マホニー(Daniel J. Mahony 1878-1944)

ダニエル J. マホーニーは、オーストラリアのビクトリア州イースト・メルボルンに生まれている。イギリスで教育を受け、メルボルン大学で学び 1906 年に地質学で理学士の学位を得ている。地質学者としてケンブリッジのセジウィック博物館で岩石学の研究に従事した後、1920 年からメルボルンに戻り、ビクトリア州鉱山局に勤務した。1931 年からヴィクトリア国立博物館の館長に就任。1944 年まで館長の職にあった。マホニーの本来の専門は地質学であり、人類学や人骨を対象とした研究を行なった記録はない。小金井との遺骨交換は、博物館の収蔵資料の充実を図る取り組みの一環として、館長職として関わったと見ることができよう。

さてこれらオーストラリア側の研究者と小金井がどのように接点を持ったのかが疑問となるが、現在の入手できている資料に基づく限りでは、具体的な経緯については不明の点が多い。限られた資料に基づき現時点で指摘しうることは、以下の点である。

ヴィクトリア博物館に関しては、ヴィクトリア博物館に残されているギルバート・リッジ(Gilbert Rigg)からマホニーへ書簡(史料 1)、また『日記』の 1934 年 8 月 23 日の記載に記されている記載が参考となろう。詳細は不明であるが、ヴィクトリア博物館もしくはマホニーと個人的な関係を持っていたリッジを通じて、オーストラリア側から小金井に交換の打診があったとみなしうる。リッジがどのような立場であったのかについては、情報が不足しており推測の域を出ないが、東京滞在中に三菱商事の関係者を通じて国立博物館と東京帝国大学を訪問し、小金井との面談に至っている。恐らく商用目的での来日であった可能性がある[11]。一方で小金井の面談の際にはヴィクトリア博物館の用務と名乗っていることから見て、博物館を代表しての交渉を依頼されていたとみて間違いないであろう。

11) 東京でリッジは三菱商事の久我貞三郎と面談している。久我を通じて小金井を紹介されている。また小金井との面談には須田昭義(1900-1990)が同席している。

一方、ウィルソンとスミスとの関係については、先に見たように小金井からの要望によって日本帝国海軍の練習艦隊による遠洋航海の機会を利用してオーストラリア側の研究者との接点を得ていることが判る[12]。小金井が事前にスミスとウィルソンという研究者の存在を知っていたかどうかは不明である。但し、1911（明治 44）年に練習艦隊の関係者にオーストラリア先住民の遺骨入手の依頼を行う２年前の 1909（明治 42）年２月 26 日の『日記』に次の記述がある。

二月二十六日　金　晴
「・・略・・ターナー（エディンバラ）より頭骨所望のよしに付手紙来り返事を出す」
（小金井 2016b: 414）

このターナとは、ウィルソンのエディンバラ大学時代の指導教授であった解剖学者ウィリアム・ターナー（Sir William Turner 1832-1916）を指している。ウィルソンもスミスもエディンバラ大学医学部で医学を修めていることを考慮すると、ターナーおよびエディンバラ大学経由で小金井がこの二人の存在を知った可能性も想定できる。

小金井とオーストラリアの解剖学者との関係および遺骨交換の記録としては、さらに古い記述が『日記』の中に見いだせる。それは小金井のヨーロッパ留学から帰国直後の 1887（明治 20）年 11 月 28 日の記述である。

十一月二十八日　月　晴
「豪州アデレード大学ワトソン氏より南豪州土人の骨格送附」　（小金井 2016a: 181）

三月十六日　金　晴
「A. ワトソン（アデレード）氏に骨格の令状を出す」　（小金井 2016a:189）

ここで示されたワトソン氏とは、当時オーストラリアのアデレード医学校の解剖学教授であったアーチボルト・ワトソン博士（Archibald, Watson 1849-1940）を指している。ワトソンと小金井の接点も現時点では不明である。ワトソンは、小金井よりも 10 歳上であるが、医学を学ぶために 1878 年から 1885 年までドイツ、フランス、イギリスに留学していた。小金井のドイツ留学期間は、1881 年から 1885 年であり、丁度両者は同時期にヨーロッパで医学を学んでいたことになる。年譜を比較するとヨーロッパ留学が二人を引き合わせた可能性が高い（表１）。ワトソンからアボリジニの骨格が小金井へ送られてくるのは、二人がヨーロッパから帰国した 1885 年の２年後のことであり、

12) ヴィクトリア博物館から小金井へ寄贈されたオーストラリア先住民の遺骨は、男女２体であり、１体はノーザンテリトリーから、もう１体は南オーストラリア州から収集されたものである。

帰国後にそれぞれ解剖学教授となるという共通点がある。小金井は研究の当初より自身の研究の比較資料としてオーストラリア先住民の遺骨の入手を希望し、また計画していたと見て間違いない。

第1表　小金井とオーストラリアの研究者略歴の対比

西暦	A.ワトソン	W. R. スミス	J.T. ウィルソン	D.J.マホニー	小金井良精
1849	ニューサウスウェールズ州に生まれる				
1859		スコットランドに生まれる			新潟県に生まれる
1861			スコットランドに生まれる		
1878	ゲッチンゲン大学で医学博士取得			ヴィクトリア州に生まれる	
1880	パリ大学で医学博士取得				
1883			エディンバラ大学で医学士を取得		1881–1883 ドイツ留学(1881–1883)
1884	王立外科教会フェロー	エディンバラ大学へ入学			
1885	アデレード大学解剖学教授に就任				帝國大学医学部講師
1886					帝國大学医科大学教授
1887	小金井にオーストラリア先住民の遺骨を寄贈		シドニー大学医学部に着任		ワトソンからオーストラリア先住民の遺骨を受領
1890			シドニー大学医学部解剖学講座主任		
1904		アデレード大学で自然科学博士取得			
1906				メルボルン大学で地質学士を取得	
1911		小金井と先住民遺骨を交換	小金井と先住民遺骨を交換		スミスとウィルソンへ先住民遺骨を交換
1913		エディンバラ大学で医学博士取得			
1921					帝国大学医学部を退官
1931				国立ヴィクトリア博物館館長に就任	
1935				小金井からアイヌ頭骨を受領	マホニーへアイヌの頭骨を寄贈
1936				小金井と先住民遺骨を交換	マホニーと先住民遺骨を交換
1937		オーストラリアにて死去			
1940	オーストラリアにて死去				
1944				オーストラリアにて死去	東京にて死去
1945			イギリスにて死去		

7　小金井が寄贈したアイヌ民族の遺骨の由来

小金井が交換を目的にオーストラリアへ寄贈したアイヌ民族の遺骨の入手経路についても確認しておく必要があろう。小金井がヨーロッパ帰国後の1888（明治21）年と1889（明治22）年に長期にわたるアイヌ民族の遺骨収集を北海道において行なったことは、広く知られている（小金井1889、1926）。しかし、オーストラリアへ寄贈されたアイヌ民族の遺骨は、小金井が1888（明治21）年と1889（明治22）年に北海道で収集したコレクションの中から寄贈したものではない。小金井は、当初リッジから示されたアイヌ民族とオーストラリア先住民の遺骨の交換について実際の遺骨ではなく、遺骨の石膏模型の交換を提案している。最終的には実際の遺骨が交換されたわけであるが、ここに小金井のコレクションへの執着を垣間見ることができる。ではオーストラリアへ寄贈されたアイヌ民族の遺骨はどのように確保されたのであろうか。

1936（昭和11）年9月7日にヴィクトリア博物館のマホニー宛に送付された遺骨は、同年夏に解剖学教室の講師（当時）であった横尾安夫が樺太で入手したものであった。『日記』では、1936（昭和11）年8月21日の記述に次のようにある。

八月二十一日　金　晴

「八時教室、横尾氏樺太旅行より七月末に帰京せりと、来室旅行談、オロッコ人を計測したりと、アイノ頭骨一個獲たり・・(以下、略)」　（小金井2015b:494）

小金井はオーストラリアとの交換に際して、新たに交換用の遺骨を探していた。小金井が交換用のアイヌ民族の遺骨を探していたことは、やはり『日記』の中に北海道在住の関係者や知り合いを通じて新たな交換用の遺骨を探す小金井の姿を追うことができる。小金井は、リッグとの交換に関する協議を行なった直後の 1934（昭和９）年 10 月 10 日から 10 月 19 日までに北海道を訪問しているが、『日記』には札幌での記述として、アイヌ民族の遺骨を入手するために斡旋を依頼した記載が以下のように見られる。

十月十二日　金　快晴
「・・(前略)・・市電にて帝大正門を見てこれより植村尚清氏を訪ふ、アイノ頭骨のことを頼み六時宿に帰る」　（小金井 2015b:398）

小金井のアイヌ民族の遺骨の入手依頼は、東京へ戻った後も行われたようである。11 月 1 日以降に以下の一連のやりとりが記載されている。

十一月一日　木　曇
「・・(前略)・・札幌植村尚清氏へ挨拶書、関場不二彦氏へ高田家に縁組祝並に記念品贈与の礼と同時にアイノ頭骨斡旋方依頼の書面を出す　六時前帰る」　（小金井 2015b: 403）

十一月三日　土　晴　祭日
「・・(前略)・・札幌植村氏より書面来、アイノ頭骨にて尽力す云々」　（小金井 2015b: 404）

十一月二十八日　水　晴
「八、二〇教室、早く弁当を使ひ湯島歯校に島峰氏を訪、札幌関場氏親書を以てアイノ頭骨一個受領の件、島峰氏快く承諾す、而も本校にあるよし早速其在室に到りて一個選出す、下顎なし、一時去る・・(以下略)」　（小金井 2015b: 407）

十二月四日　火　曇雨
「・・(前略)・・札幌関場氏へアイノ頭骨一個島峰氏より領収せること及び感謝の手紙を出す・・(以下、略)」　（小金井 2015b: 407）

十二月十四日　金　晴
「・・(前略)・・入沢達吉氏来室、伊豆下田の眼科医村松春水という人、此夏網走に滞在中アイノ骨格多数同所にあるよし所望ならば同氏目下近き巣鴨町に息の家に居るを以て直接談合然るべ

し云々・・(以下、略)」 (小金井 2015b: 409)

十二月十五日　土　晴曇

「昨日、入江氏が紹介せる村松春水氏巣鴨町三ノ廾八村松円ノ助を訪ふ　アイノ骨十一個網走の一寺院にあるよしにて氏来春再び同地へ行く筈に付引き受けて斡旋すべきこと承諾せらる・・(以下、略)」 (小金井 2015b: 409)

十二月十二日　金　晴

「・・(前略)・・山越工作所員来り横尾と談合模型製作のためアイノ頭骨一個渡す」 (小金井 2015b: 410)

この一連のやり取りは、年を越して 1935（昭和 10）年に続く。

一月十日　木　雨

「・・(前略)・・札幌植村尚清氏来訪の由、直に帰宅すれば教室の方に行かれたりと、これは小使の間違にて待居る中氏再び来、去十月頼みたるアイノ頭骨に付談あり」 (小金井 2015b: 414)

五月六日　月　晴

「七、三〇教室　此旅行出発の際札幌植村氏より送付の「アイノ」頭骨到着せるも其儘受取のみ出し置きたるが今日教室へ持ち行き開きたり、顔面右側欠、女、謝状を書く」 (小金井 2015b: 429)

六月十日　月　曇晴

「七、三五教室　北海道網走町米村喜男衛といふ人より自分が昨年旅行せしこと新聞にて見たるがアイノ人骨（大人１、小児１）道路土工の際出土し共同墓地に埋めあり、研究資料として入用なりや云々の来書に対し返事を出す・・(以下、略)」 (小金井 2015b: 433)

八月二十日　火　晴

「村松春水大人来室、網走より返事あり　人骨は茶毘に附したりと云々兎に角望みなし、名寄町高女校長矢口親六なる人を推薦せらる」 (小金井 2015b: 443)

九月十四日　土　曇小雨

「・・略・・名寄高等女学校長矢口親六氏へアイノ頭蓋懇請手紙、入沢氏へ村松春水老人アイノ頭骨関係徒労云々手紙・・以下、略・・」 (小金井 2015b: 446)

九月二十日　金　曇

「・・略・・入沢達吉氏来室、村松春水氏アイノ頭骨談失敗にきしたることなど・・以下、略・・」

（小金井 2015b: 446）

十月二十一日　月　快晴

「村松春水氏より来書、アイノ頭骨に関する件、名寄高等女学校長矢口親六氏の書留入、同氏処有の頭骨北大解剖借用として持ち行きたりとか、なかなか面倒なことになりたり・・以下、略・・」

（小金井 2015b: 451）

十一月七日　木　快晴

「在和歌山市村松春水氏アイノ頭骨に関し手紙を出す、これは名寄高女校長矢口氏処蔵のもの北大解剖との関係面倒になりたる付ては村松氏より矢口氏に対し特に熱望の旨開陳せられたきを申送りたるなり」

（小金井 2015b: 454）

十一月二十五日　月　雨

「・・略・・名寄高等女学校谷口氏処蔵アイノ頭骨に付在和歌山市村松春水老人より来信、直に今一応切望の旨同校長宛書面発送せられたしと返事出す・・以下、略・・」（小金井 2015b: 456）

これらのやり取りから、小金井が札幌市立病院医師で医師である植村尚清や札幌区医師会会頭の関場不二彦氏、さらに北海道を旅行していた眼科医村松春水、北海道網走在住の米村喜男衛をも通じてアイヌ民族の遺骨を入手しようとしていたことが判る。その目的は、この前後の動きから見て、オーストラリアへ寄贈するためであったことが明らかである。最終的に小金井がマホニーへ送った遺骨の由来を示す手かがりは、ヴィクトリア博物館に保管されていた遺骨に残されていた。

8　遺骨に残された手がかり

メルボルンの国立ヴィクトリア博物館に保管されているアイヌ民族の遺骨を実際に確認する機会は、2017 年 9 月 17 日に得られた。この訪問には、東京大学の佐藤宏之教授と琉球大学の石田肇教授が同行した。遺骨の実見に際しては、ヴィクトリア博物館の関係者と最初に情報を提供いただいたナップマン氏の支援を受けた。遺骨を実見することによって、当初オーストラリア側から提供されていた情報には含まれていなかった遺骨の由来に関わる新たな情報を確認することができた。

収蔵番号 42741: Ainu: Hokkaido（1936 年 4 月登録　寄贈者：小金井良精）とされた遺骨には、側頭部には、「No.171」と朱書きされており、また真鍮製の金属製プレートが付されていた。この

真鍮製の金属プレートには「札幌北辰病院　関場不二彦」と刻まれていた。「No.171」という朱書きはオーストラリアへ寄贈する前に保管されていた場所での収蔵番号の可能性があり、「札幌北辰病院　関場不二彦」と書かれたプレートはこの遺骨の本来の所有者を示す情報と考えられた。

ここで重要となるのが『日記』の 1934（昭和９）年 11 月１日と 11 月 28 日の記述である。そこには、小金井と当時札幌に在住していた関場不二彦との間のやり取りが記されている。すなわち、北海道旅行から戻った直後の 11 月１日の記述である。

第１図　遺骨に付された真鍮製プレート



1



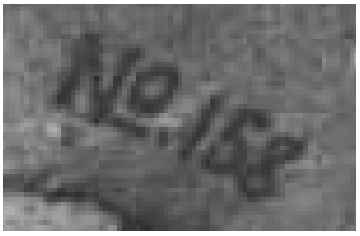
2

１は、東京医科歯科大学に保管されていた遺骨に付けられていた真鍮札
２は、ヴィクトリア博物館に保管されていた遺骨に付けられていた真鍮札
いずれも「札幌北辰病院　関場不二彦」と刻まれている。

第２図　遺骨に朱書きされた標本番号



1



2

１は、ヴィクトリア博物館に保管されていた遺骨の側頭部に朱書きされていた番号。
２は、東京医科歯科大学に保管されていた遺骨の側頭部に朱書きされていた番号

十一月一日　木　曇雨

「関場不二彦氏へ・・（中略）・・と同時にアイノ頭骨斡旋方依頼の書面を出す」

（小金井 2015b: 403）

十一月二十八日　水　晴

「札幌関場氏親書を以てアイノ頭骨一個受領の件、島峰氏快く承諾す、而も本校にあるよし早速其在室に到て一個選出す、下顎なし、一時去る」　（小金井 2015b: 407）

この『日記』の記述とヴィクトリア博物館に残された遺骨につけられていたプレートを合わせて検討すると、小金井から依頼を受けた関場が自ら収集に関係した遺骨を小金井に提供したことが判る。しかし、関場が提供に同意した時点でこの遺骨は、関場の手元にはなかった。関場は、島峰徹を経由して遺骨を小金井に提供すると回答している。関場と島峰、そして小金井の間のやりとりを理解するためには、別の角度からの検討が必要となる。ここに関わる関場と島峰についても簡単に触れておきたい。

関場不二彦（1865-1939）は、福島県会津若松出身で東京帝国大学医科大学においてスクリバ（Julius K. Scriba 1848-1905）の下で学んだ外科医である。関場は北海道医師会、札幌医師会の初代会長を務めており、アイヌ民族の医療に尽力したジョン・バチェラー（John Bachelor 1854-1944）とも交流を有し、これを支援した人物である。一方、『日記』に登場する島峰とは、東京高等歯科医学校（現在の東京医科歯科大学）を設立した島峰徹（1877-1945）のことである。

島峰は小金井と同郷の新潟県長岡出身であり、1901（明治 34）年に東京帝国大学医科大学へ入学、小金井の下で解剖学と組織学を学んだ。その後、1907（明治 40）年から 1914 年（大正３）年まで

ドイツへ留学し、ベルリン大学とブレスラフ大学（現在のポーランドのブラツワフ大学）に歯科学を学んだ。

島峰は、1919（大正９）年と 1920（大正 10）年に同僚の金森虎雄とともにアイヌ民族の歯牙の生体観察を北海道において行なっている（島峰・金森 1926）。この際に関場不二彦より９体、三野倫次郎より１体のアイヌ民族の遺骨を貸与されている（島峰・金森 1926）。島峰と金森による報告書には、このことについて次のように記している。

「左記の諸氏は材料収集に際し、多大の援助を與へられ、殊に多忙の折にも不拘、毎年直接間接に至大の便宜を與へられたるは深く感銘する所にして茲に厚く謝意を表す。渡邉和太郎氏。頼尊淵之助氏。札幌関場病院長（純粋アイヌ人の頭骨九個貸與さる）。三野倫次郎氏（純粋アイヌ人頭骨一個寄附）・・以下、略・・」（島峰・金森 1926）。

島峰が収集したアイヌ民族の遺骨は、東京高等歯科医学校から東京医科歯科大学に引き継がれた。2019 年２月 14 日に東京医科歯科大学の島峰コレクションを担当者のご厚意により実見させていただく機会を得ることができた。その結果、東京医科歯科大学に保管されているアイヌ民族の遺骨にもヴィクトリア博物館において確認できたものと同様のプレートを確認することができた。さらにヴィクトリア博物館で実見した遺骨の側頭部に残されていた「No.171」という朱書きの番号についても、東京医科歯科大学の島峰コレクションに同様の書体の朱書きの番号が付されているおり、この番号が 1929（昭和３）年に東京高等歯科医学校に解剖学教室が設置された際に着任した解剖学者である藤田恒太郎（1903-1064）によって、カード化された際に付された収蔵番号である可能性が高いことも明らかとなった。また筆者らが国立ヴィクトリア博物館でアイヌ遺骨を実見し、確認するまでは、東京医科歯科大学の島峰コレクションにおいて「No.171」の頭骨は標本、カードともに不在で欠番とされていた。

このようにヴィクトリア博物館、小金井による『日記』の記述、さらに東京医科歯科大学のコレクションの諸々の情報と資料を総合すると、ヴィクトリア博物館に保管されている収蔵番号 427141 のアイヌ民族の遺骨は、本来、関場不二彦が収集し、1919 年から 1926 年の間に島峰徹に貸与したものであり、その後に 1934 年に小金井良精から要請を受けた関場が、島峰に依頼して小金井に譲渡された後に、1935 年にヴィクトリア博物館のマホニーへ寄贈されたものであると明らかとなったのである [13]。

一方で、キャンベラのオーストラリア国立博物館に保管されているアイヌ民族の遺骨については、2017 年９月 19 日にピッカリング博士のご厚意で実見することができた。この訪問には、東京大学の佐藤宏之教授と琉球大学の石田肇教授、北海道大学の北原次郎太准教授が同行した。残念ながら、

13) 同時に寄贈された石膏模型は、現在も所在が不明である。

事前にピッカリング博士より提供いただいた情報に追加できる資料や情報を現地で確認することはできなかった。その理由としては、ヴィクトリア博物館の遺骨がそのまま寄贈先に保管されていたのに対して、オーストラリア国立博物館の遺骨は、本来の寄贈先であるアデレードのスミスの手元を離れ、一旦、旧オーストラリア国立解剖学研究所へ移管され、さらにオーストラリア国立大学へ貸与されたのちに現状に至るという複雑な履歴が影響していると思われる。仮に将来的にスミス関連の書類が確認されることがあれば、追加情報が得られる可能性もあろう。

9　小金井良精による先住民族の遺骨交換と課題

本論では、小金井良精がオーストラリアの研究者との間に行ったアイヌ民族とオーストラリア先住民の遺骨交換について、ヴィクトリア博物館とオーストラリア国立博物館に保管されていた遺骨と史料類、それと小金井の『日記』に記されていた記述を対比することから、それぞれの遺骨の由来や交換に至る経緯を検討してきた。小金井の『日記』には、オーストラリアの研究者以外との間にも遺骨の交換を行った記述が数多く記されている。オーストラリアとの交換は、あくまで小金井による人類学資料収集の一部に過ぎない。その収集過程は長期にわたり、オーストラリアとの間に限定しても、「資料交換」は以下のようになる。

（1）1887（明治 20）年、アデレード大学ワトソン教授からオーストラリア先住民の遺骨を受領
（2）1911（明治 44）年、アデレードのスミス博士とシドニー大学ウィルソン教授との間で遺骨を交換
（3）1936（昭和 11）年、ヴィクトリア博物館マホニー館長との遺骨の交換

上記の交換が行われた時期を小金井の年譜と比較すると、次のような流れを読み取ることができる。1887（明治 20）年の交換は、小金井がドイツ留学より帰国した 1885（明治 18）年の２年後に行われたものである。周知のように小金井は、この翌年の 1888 年に北海道で組織的なアイヌ民族の遺骨の収集調査を実施している（植木 2006、小金井 1889、1926、2016b）[14)]。

ドイツ留学中の小金井の研究テーマは、網膜・虹彩の組織学研究であり、留学中に書かれた論文も網膜・虹彩に関するものである（鈴木 1974）。しかし鈴木尚も指摘しているように、ドイツから帰国後に小金井が網膜・虹彩に関する組織学研究に注力した形跡は認められない。小金井の教え子でもあった鈴木は、この小金井の研究の転機をドイツ留学中の師弟関係に求めている（鈴

14) 1888（明治21）年７月の調査旅行には、東京人類学会を主催していた坪井正五郎（1863-1913）も同行している。また翌1889（明治22）年の夏にも続けて北海道において発掘旅行を実施している（小金井1926）。この２年間の調査旅行で発掘収集されたアイヌ遺骨は166体にのぼる。

木 1974:3)。小金井が直接師事したワルダイエルのベルリン人類学会（Beriliner Geselleschaft für Anthropologie）での活動、後に移籍したベルリン大学の解剖学研究室を主宰していたルドルフ・ウィルヒョウ教授（Rudolf Virchow 1821-1902）との接点から、すでにドイツ留学中に骨学的研究を小金井が構想していた可能性を指摘するのである。

一方で『日記』のドイツ留学中に記述には、人骨標本について言及した記載を見いだすことはできない。小金井が海外の研究者との間で人骨標本の交換を開始するのは、ドイツから帰国し、帝国大学医科大学の解剖学教授となった 1886（明治 19）年以降のことである。小金井の研究の方向性は、帰国後に留学中のテーマから大きく変更されたと言えるのではないだろうか。現時点で小金井の研究関心の転換がどのように生じたのかについて明示する資料が管見の限り知り得ない。

現状で考えられる要因の一つは、当時の東京人類学会内部にあった人骨研究への期待である。『東京人類学報告』第５号（1886）に、東京人類学会会員であった農学者の福家梅太郎による「人骨研究」と題する論文がある（福家 1886)。福家は当時の人種研究に必要な人骨資料がまだ数少ないと指摘する中で、「余ノ聞ク所ニヨレバ人骨ノ存在セシハ只常陸ノ陸平、肥后ノ大野ニ過キス・・中略・・其他北海道ニ於テアイノノ塋墓ヨリ頭骨四個ヲ得タルノミ」（下線は著者）と述べている（福家 1886:83）[15]。当時（1886 年）の東京人類学会の中に人骨資料の収集の必要性を求める声があったことは間違いないであろう。

『日記』にも 1886（明治 19）年 11 月 20 日の記述にドイツ留学で知己を得たストラスブルク大学の解剖学教授グスタフ・シュワルベ（Gustav Schwalbe 1844-1916）に対して、「シュワルベ君え骨格をおくるべし云々の手紙だす」（小金井 2016a:151）との記述が見られる。小金井も人骨研究の必要性を意識していたとみなしてよいであろう。1887（明治 20）年の交換は、小金井のこれ以降の人類学研究を行う契機となった時期と重なることを指摘しておきたい。

1911（明治 44）年の交換は、先に見たように小金井から海軍の練習航海でのオーストラリア訪問を利用して「資料交換」を求めたものであった。当時の小金井は年齢的にも 50 代であったが、『日記』に記された記述を拾うだけでも、オーストラリアとの交換の前後にロシアや東南アジア、南アメリカとの間で積極的に寄贈や交換を行なっていたことを確認できる（表２）。

1936（昭和 11）年の交換は、小金井の晩年のものである。この交換が行われた時点では、小金井は 77 歳で、すでに東京帝国大学は退職していた（1921（大正 10）年退職)。しかし、名誉教授として研究室を保有しており、『日記』を見ても、現職教授時代と変わらずほぼ毎日出校し、研究

15) 2012年に文部科学省が行なった日本国内のアイヌ遺骨に関する確認調査の結果によれば、東京大学総合研究博物館には、1888年以前に北海道で収集されたアイヌ遺骨が４体あることが記録からわかる（北大文書開示研究会「文部科学省開示文書（2018年６月26日開示）」：http:/hmjk.world.coocan.jp/materials/list_monkasyo.html)。それぞれの収集地と収集年は、根室が1884（明治17）年、石狩が1885（明治18年)、留萌が1887（明治20）年、そして釧路が1888（明治21）年となっている。東京大学側の記録によれば、これらは1888年の小金井による収集ではなく、収集者は不明となっている（アクセス：2018年11月７日)。

第２表 『日記』から確認される海外との資料交換一覧

西暦	元号	月日	入手資料	国名	入手元	個体数	西暦	元号	月日	寄贈資料	国名	寄贈先	個体数
1887	明治20	11月28日	オーストラリア先住民頭骨	オーストラリア（南オーストラリア）	アデレード大学A.ワトソン教授	１？							
1888	明治21	10月8日	不明	ドイツ	ストラスブルク大学G. A. シュワルベ教授	不明	1888	明治21	6月22日	日本人皮膚	ドイツ	G. A. シュワルベ教授（ストラスブルク大学）	不明
1888	明治21		北海道調査旅行										
1889	明治22						1891	明治24	9月12日	「アイノ」骨格等	ドイツ	H.W.G. ワルダイエル教授（ベルリン大学） R. ハルトマン教授（ベルリン人類学・民族学・先史学協会） G.A.シュワルベ教授（ストラスブルク大学）	不明
1892	明治25	4月19日	南洋人頭骨	不明	三宅雄二郎	2							
							1893	明治26	8月24日	中国人頭骨および脳髄	ドイツ	H.W.G. ワルダイエル教授（ベルリン大学）	4
1894	明治27		日清戦争										
1895	明治28	4月17日	頭骨	中国（金州）	森林太郎（森鷗外）	1							
		4月29日	頭骨	朝鮮（平壌）	飯沢某	8							
1896	明治29	1月5日	中国人頭骨	中国（営口）	滝本元太郎（軍医）	1							
1899	明治32		不明		ドレスデン動物学・人類学・民族学博物館 A・B・マイエル教授	2	1899	明治32	1月31日	頭骨	ドイツ	A・B・マイエル教授（ドレスデン動物学・人類学・民族学博物館）	2
			ドイツ人頭骨頭骨	ドイツ	ハベル博士	12			5月24日	頭骨	ドイツ	ハベル博士（未確認）	12
									11月7日	頭骨	台湾	川添正道（台湾総府医学校）	2
1900	明治33	4月9日	朝鮮人頭骨	朝鮮？	高野周省（個人）	？	1900	明治33	4月9日	頭骨	ドイツ	J.ランケ教授（ミュンヘン大学）	12
1901	明治34	2月26日	ハワイ先住民頭骨	アメリカ（ハワイ）	小林三三郎（ハワイ在住歯科医）	4							
		7月20日	朝鮮人頭骨	朝鮮？	斉藤政一（明治生命保険会社診察医）	1							
1902	明治35	1月23日	中国人頭骨	台湾（台南）	西郷吉弥（陸軍軍医）	1							
		3月31日	アラスカ先住民頭骨	アメリカ（アラスカ）	安田維蔵（個人）	？							
		8月25日	アメリカ先住民頭骨	アメリカ（サンフランシスコ）	上野季三郎（在サンフランシスコ日本国領事）	？							
1904	明治37		日露戦争										
1904	明治37	11月7日	ロシア人頭骨	戦地	森林太郎（森鷗外）	2	1904	明示37	5月25日	「アイノ」頭骨	チェコ	フィッシェル教授（プラハ）	1
		12月21日	南米先住民頭骨	イギリス（ロンドン）	福島常蔵（個人：在ロンドン）	1							
1905	明治38	7月10日	チェチェン人頭骨	チェコ（プラハ）	フィッシェル教授（プラハ）	3	1905	明治38	10月9日	不明眼球	ドイツ	グスタフ・フリッチ教授（未確認）	
		10月27日	ドイツ人	ドイツ（ゲッチンゲン）	フラウ・メルケル（ゲッチンゲン大学）	2			11月9日	日本人頭骨	ドイツ	F. メルケル（ゲッチンゲン大学）	2
1906	明治39	6月11日	ペルー人頭骨及骨格	日本（横浜）	ゴードン・マンロー（在横浜医師）	？	1906	明治39	7月22日	不明頭骨	チェコ	頭骨二個ヒュッペ教授（プラハ）へ	2
1907	明治40	3月20日	（不明）頭骨寄贈		秋山（三等軍医）	2			12月26日	脳	ドイツ	H.W.G. ワルダイエル教授（ベルリン大学）	3
			朝鮮人頭骨		石原久（歯科医）	1							
1908	明治41	9月12日	ロシア人頭骨	樺太	山越良三（個人）	3							
							1909	明治42	2月10日	日本人頭骨	チェコ	クラーチュ（プレスラウ）へ邦人頭骨発送	2
1910	明治43	4月18日	台湾原住民族	台湾	長野純蔵（個人）	2							
1911	明治44	3月9日	オーストラリア先住民頭骨	オーストラリア（アデレード） オーストラリア（シドニー）	W.ラムゼイ・スミス博士（アデレード） J.T.ウィルソン教授（シドニー）	2	1911	明治44	3月9日	「アイノ」頭骨	オーストラリア	W.ラムゼイ・スミス博士（アデレード）	1
		3月24日	アイノ頭骨	樺太（大泊）	樺太大泊の人	1				「アイノ」頭骨	オーストラリア	J.T.ウィルソン教授（シドニー大学）	1
		4月14日	台湾原住民族骨格		在台湾桜井某	2			8月26日	日本人頭骨	ドイツ	H・フィルヒョウ教授（ベルリン大学）	？
1912	大正元年	12月20日	樺太アイヌ頭骨	樺太	馬場遹雄（医学生２年生）	1	1912	大正元年					
		4月29日	ボルネオ先住民骨	ボルネオ	元島朔太郎氏								
		7月19日	南米先住民頭骨	アルゼンチン（ブレノスアイレス）	レーマン・ニーチェ夫妻（アルゼンチン国ブレノスアイレス博物館）	3			7月19日	日本人頭骨		アルゼンチン国ブレノスアイレス博物館	3
		10月24日	朝鮮人骨格		軍医学校秋山錬造（軍医学校）				10月25日	頭骨二個	ドイツ（ベルリン）	ディーク教授（ベルリン）	2
1914	大正３	9月29日	ダヤク（ボルネオ先住民）頭骨	ボルネオ	元島朔太郎	1							
1915	大正４	1月30日	チャロモ人（サイパン先住民）	サイパン	高宮隆（横須賀海軍軍医中監）	1							
1917	大正6	11月13日	朝鮮人骨格	朝鮮	山岸良三？	1							
1918	大正7	10月16日	パラオ先住民骨格	パラオ	岩崎巖彦（パラオ民政農務技師）	1							
1921	大正10	9月13日	ニューギニア頭骨二個到達	ニューギニア	加藤太郎吉（南洋探検家）	2	1921	大正10					
									12月8日	不明骨格		山崎晴雄(北海道帝国大学医学部教授)	２ないし３
		12月14日	小金井 教授職を辞職										
1922	大正11	1月17日	チェチェン人頭骨	ソ連	ズドル（画家）	12							
		2月27日	不明頭骨	南洋（不明）	加藤太郎吉（南洋探検家）	3							
									5月9日	頭骨		ズック（詳細不明）、西教授経由	7
									11月27日	日本人骨		A. ハードリチカ（スミソニアン自然史博物館長）	15
1923	大正12							大正12	3月8日	日本人頭骨		ズック（詳細不明）	5
		11月10日	頭骨及頭骨模型		A. ハードリチカ（スミソニアン自然史博物館長）	14							
1925	大正14								4月27日	ミクロネシア人頭骨及骨格	仙台	長谷部言人（東北帝国大学医学部）	6
		5月18日	ペルー人変形頭骨	ペルー	呉某（福岡在住 ）	2							
1927	昭和2	1月26日	ペルー人頭骨二個贈らる	ペルー	石原喜久（東京帝国大学細菌学教授）	2							
		5月10日	古エジプト人頭骨	エジプト	移川子之助（台北帝国大学人種学教授）								
1929	昭和4	1月8日	南頭骨（詳細不明）		西成甫（東京帝国大学解剖学教授）		1929	昭和4	10月24日	日本人胎児	ロシア（モスクワ）	M.S.プリセツキー教授（モスクワ大学人類学博物館	4
1934	昭和9						1934	昭和9	2月16日	日本人骨格と胎児	ロシア（モスクワ）	M.S.プリセツキー教授（モスクワ大学人類学博物館	成人骨格２ 胎児４
		10月10日	北海道旅行										
1935	昭和10	9月10日	プリヤート骨格、 コーカサス出土 ネアンデルタール人頭骨模型	ソ連		2	1935	昭和10	10月10日	アイノ頭骨と同模型。	オーストラリア	D.マホニー博士（国立ヴィクトリア博物館館長）	頭骨１ 模型１
1936	昭和11	7月7日	オーストラリア先住民頭骨	オーストラリア	D.マホニー博士（国立ヴィクトリア博物館館長）	2	1936	昭和11					
									9月7日	アイノ頭骨	オーストラリア	D.マホニー博士（国立ヴィクトリア博物館館長）	1

を継続していた。流石にこの前後には海外の研究者との間で活発な「資料交換」を行なった痕跡を『日記』に見出すことはできない。『日記』の記述に従えば、ヴィクトリア博物館のマホニーとの交換が海外の研究者との最後の「資料交換」であったとみてよかろう。

小金井が北海道において自らアイヌ民族の遺骨を収集し、コレクションの根幹を形成したのは、小金井 31 歳から 32 歳の時であった。小金井はこれ以降、自らアイヌ民族を含めて他の先住民族の遺骨についても自ら発掘収集することは行っていない。コレクションの収集は、もっぱら寄贈と海外の研究者との交換が中心となっている。このように見ると、小金井コレクションの形成過程の解明には、海外を含めた当時の研究者間に存在した国際的な遺骨交換のネットワークの解明が重要な鍵を握っていると言えよう。

19 世紀から 20 世紀にかけてヨーロッパを中心に人種主義的人類学が隆盛し、解剖学者や人類学者たちが人類標本の収集が行われた。その過程では人類学標本の国際的な交換も行われていたことが知られている（Fforde, et al. 2002 ほか）。本論で確認した小金井のオーストラリアの研究者との交換もこのような国際的なネットワークの一端を成すものであった見ることができよう。

何よりも、本論ではアイヌ民族の遺骨に焦点を当てて論じてきたが、アイヌ民族の遺骨と交換されて小金井の元へ運ばれたオースラリア先住民の遺骨は、未だ東京大学に保管されたままであることを忘れてはならない。我が国の研究機関にどれほどの海外の先住民族の遺骨が保管されているのかについては確認調査が行われておらず、その全容は未だに把握されていない。

10　返還への道筋

小金井を介して海外へ送られたアイヌ民族の遺骨の由来を海外に残された史料と日本国内に残された史料を対比することで検討を行ってきた。海外にはまだ多くのアイヌ民族の祖先の遺骨が博物館など研究機関の一角に人知れずに保管されている。確認できているものは氷山の一角に過ぎない。

また明らかになっている遺骨についても、その収集過程や背景に関しては不明の点が多い。何よりも当事者であるはずのアイヌ民族にとっては、血縁者や関係者の遺骨が見知らぬ国の一角に誰にも知られずに保管されてきたという事実すら知られていないという現状がある。同様の状況は世界各地の先住民族でも指摘される課題であるが、その取組みは、国毎に差があり、我が国の取組みは、海外と比べて情報公開も含めて非常に遅れをとっている。

海外に運ばれ遠く故地を離れた場所にある先住民族の遺骨の所在を確認するためには、関係者間での情報共有と国際的な共同研究が不可欠である[16]。先住民族の遺骨の返還に関わるステークホルダーには、返還を希望する先住民族個人や家族、そしてコミュニティーがあり、現在遺骨を保管す

16) オーストラリアでの調査と合わせて、イギリスでの調査も行っている（2019年）。アメリカや東欧での調査も予定していたが、2020年からの新型コロナウィルスの世界的な慢延により、現地調査は中断した状況にある。

る博物館などの研究施設もこれに含まれる。オーストラリアやニュージーランド、アメリカやカナダ、そしてスカンディナヴィア諸国では国も重要な枠割を果たしている（加藤 2018）。そして研究者もまたこの問題の重要なステークホルダーである。

過去の研究者により生じたこの問題を解決することは、今を生きる研究者の責務であるといえよう。なぜならば研究というものは、自分の力のみで成り立つのではなく、先人の肩の上に乗ることにより積み上げられてきたものなのであるから。継承すべきは研究成果の長所や利点のみではない。負の歴史も直視し、その解決のためにどのように関与できるのかを考え、取組むことも我々の責務であり、研究がその先に進むために必要不可欠な取組みであろう。

オーストラリアにおける現地調査ではナップマン博士やピッカリング博士を始めとするヴィクトリア博物館、オーストラリア国立博物館、オーストラリア国立大学の関係者の多大なる協力を得た。末筆ではあるが深く感謝申し上げる。なお本研究は、JSPS 科研費 JP17H04530、JP21H04352 の助成を受けたものである。

参考文献

植木哲也（2008）『学問の暴力』、東京：春風社

小金井良精（1889）「北海道石器時代の遺跡に就て」『東京人類学會雑誌』45: 34-39.

————（1926）『人類学研究』、東京：大岡書店

————（2015a）『小金井良精日記　昭和篇 1927-1942』東京：クレス出版

————（2015b）『小金井良精日記　大正篇 1913-1929』東京：クレス出版

————（2016a）『小金井良精日記　明治篇 1883-1899』東京：クレス出版

————（2016b）『小金井良精日記　明治篇 1900-1912』東京：クレス出版

小金井喜美子（1926）「島めぐり」、『人類学研究』、567-601、東京：大岡書店

加藤博文（2018）『先住民族の遺骨返還ー海外における先住民考古学としての取り組みー』、先住民考古学シリーズ第 1 集、札幌：北海道アイヌ・先住民研究センター、http://hdl.handle.net/2115/68822

鈴木尚（1974）「小金井良精先生と Erwin von Baelz 博士」『人類学雑誌』82 (1): 1-9.

島峰徹・金森虎雄（1926）『純粋生體「アイヌ人」の口腔器關特に歯牙の研究』、東京：大岡山書店

福家梅太郎（1886）「人骨研究」、『東京人類学報告』第５号 : 78-83

星新一（2004）『祖父・小金井良精の記』（上）（下）、東京：河出書房新社

横尾安夫（1942）「小金井良精傳」、『東亜の民族』：439-478、東京：理想社

Fforde C., Hubert J., and Turnbull P. (eds.) (2002) The Dead and their Possessions: Repatriation in Principle, Policy and Practice (One World Archaeology), Routledge.

Fforde C., C.T. McKeown, and H. Keeler (eds.) (2020) The Routledge Companion to Indigenous Repatriation: Return, Reconcile, Renew (Routledge Companions), Routledge.

（2021 年 10 月 1 日受付、2022 年 1 月 11 日審査終了）

Transported Ainu human remains to Australia and Dr Yoshikiyo KOGANEI

Hirofumi KATO*

ABSTRACT

This article focuses on the international exchange of Indigenous remains involving prof. Yoshikiyo KOGANEI who is the first Japanese professor of anatomy, in relation to Australian researchers. Specifically, it examines the origin and history of the Ainu remains exchanged by comparing materials in Australian museums with Koganei's own diary. In addition, by examining the researchers involved, I attempt to clarify the background to the international exchange of Indigenous remains.

Keywords: Ainu people, International repatriation, Indigenous repatriation issues, KOGANEI Yoshikiyo, Australia

* Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University